

付篇1

山口市大内御堀の採取遺物

横山 成己

1. 資料の由来(図69、写真159～161)

山口大学埋蔵文化財資料館には、当館設立以前に本学教員および学生により県内各地にて採取された考古資料が多数収蔵されている。その大多数は、本学教育学部で教鞭をとっていた小野忠熙氏と、氏の指導した山口大学地理学談話会や山口大学文化会考古学部に所属した学生により採取されたものと考えられ、時期としては小野氏の教育学部光分校着任まもなくの昭和25年(1950)以降から、本学吉田地区統合移転直前の昭和40年代中頃に集中する。

本稿にて紹介する山口市大内御堀採取資料は、一部が拙稿「館蔵品調査報告—古墳時代から平安時代の遺物—」(横山2020)にて紹介したものに加え、令和2年(2020)に山口県立山口博物館との共催で開催した『講座 古代ウォーク』が山口市大内地区を対象とすることになった(横山2021a)ことを受け、再度館蔵品の悉皆調査を実施し、図示可能品を抽出したものである。

山口市大内地区は、樫野川中流域に位置する山口盆地の東に接しており、四方を山に取り囲まれた小盆地(大内盆地)にある。盆地の北縁には仁保地区から仁保川が、南縁には小鯖地区から問田川が流入しており、盆地の西端で樫野川に合流している。盆地最西端の仁保川下流右岸域は、狭義の地名として御堀(大字御堀字御堀)と呼称されており、東に隣接する氷上(大字御堀字氷上)とともに、西折した仁保川により形成された上位段丘から中位段丘にかけて遺跡が密に展開している地域である(図69、写真161)。

当館所蔵の大内御堀に関わる遺物で最も古く採取されたものは、昭和26年(1951)12月18日の日付を有する(MH3:コンテナ9袋13)。小野氏による採取品であるかは不明であるが、氏の教育学部への異動が契機となり、氏や氏の関係した地理学談話会の学生により採取されたと推測される。遺物への



図69 山口市大内御堀・氷上の遺跡分布状況

注記を見ると、御堀における資料採取は、昭和28年(1953)4月14日(MH28「大字御堀字下堀 最下部箱式棺付近散布」MH6「^{註4}御堀」の注記あり)、5月18日(MH8、MH20「下堀原始墳墓地区」の注記あり)、7月3日と繰り返し行われたようである。遺物の採取地は、「下堀」の注記から象頭山南麓、現在の遺跡名では象頭山墳墓群^{註4}と考えられる(写真159・169)が、「御堀 I 8」「御堀 7 I」「御堀 9 I」「御堀 2 II」など地区を示すと思われる注記の存在(表10)は、より広域で採取が行われたことを想像させる。

本学による遺物採取が行われてまもなくの昭和28年8月11日には、山口県立山口博物館の学芸員であった佐伯敬紀氏により、象頭山墳墓群にて須恵器甕体部5片(うち2片は接合する)が採取されてお^{註5}り、同年10月21日から23日にかけて象頭山麓(福田氏宅裏山)にて組合式箱式石棺1基(人骨歯が少量出土)と横穴式石室墳1基(金環2、銀環2、滑石製勾玉1、水晶製切子玉1、管玉1、ねり玉70、小玉1、鉄剣1が出土)^{註6}の発掘調査が実施されている(佐伯1958)。佐伯氏の大内地区における一連の調査は、^{註7}本学教員や学生による遺物採取に端を発した可能性^{註8}がある。



写真 159 象頭山遠景 (南東から)



写真 160 象頭山南麓近景 (東から)

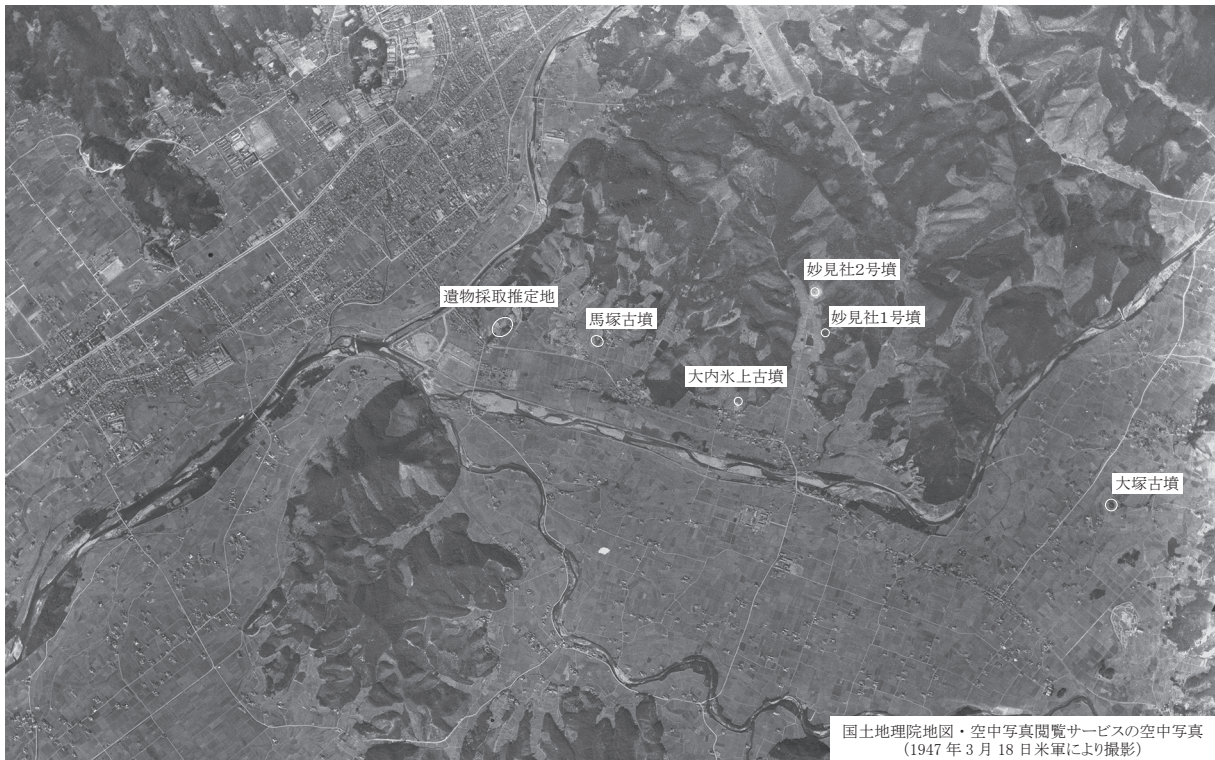


写真 161 昭和 22 年 (1947) の山口市大内地区

国土地理院地区・空中写真閲覧サービスの空中写真
(1947年3月18日米軍により撮影)

2. 御堀採取資料(図70・71、写真162～166、表10)

図示可能な資料は、土師器2点を除きいずれも須恵器である。**MH1**は10片の接合品で、完形復元可能な坏身である。「御堀 口I」の注記が残る。焼き歪みの大きい個体で、器高3.6～4.4cm、復元口径10.3～11.8cmを測る。丸みを帯びた底部から、開き気味に坏部が立ち上がる。坏部外面2/3～1/2に回転ヘラ削りを施す。受部やかえりのつくりはシャープで、焼成状態も良好である。**MH2**は坏身の口縁一底部片で、ほぼ完形に復元可能である。内面に採取年月日とみられる「2□1□1□」の注記が残る。器高4.15cm、復元口径9.3cm、復元底部径4.5cmを測る。平底気味の底部から強く内湾して坏部が立ち上がる。回転ヘラ削りは外面1/6にのみ施されている。焼成はやや不良で、内外面とも灰白色を呈している。**MH3**は坏蓋の天井一口縁部片。天井中心部を失うが、ほぼ完形復元可能な資料である。外面に「御堀 2Ⅱ」「26.12.18」の注記が残るが、インクが異なっている。低いドーム状の天井部から、緩やかに内湾して口縁に降下する。口縁端部は屈曲気味に短く下垂させる。天井中心部を欠失しているため、つまみの有無は不明である。復元口径16.6cm、残存高3.1cmを測る。**MH4**は内外面の器面調整などから坏蓋天井部片と判断した。外面に「下堀原始墳墓地区出土」の注記が残る。低いドーム状の天井部の外面には重ね焼による変色が見られる。内面は不定方向のナデが施される。**MH5**は坏蓋口縁部片。遺物袋に同入されていたカードには「66-3下堀」と記されている。器壁が厚く、やや焼成不良の個体で、口縁部を水平に外方に開き、端部をほぼ垂直に短く下垂させる。残存高1.85cmを測る。内外面とも回転ナデが施される。**MH6**は坏蓋口縁部の小片。外面に「F御堀 28.4.14」の注記が残る。Fは象頭山西端麓に鎮座する厳島神社を示すのであろうか。扁平な天井部から口縁端部をやや外方に短く下垂させており、外端部に沈線が1条巡らされる。残存高1.05cmを測る。**MH7**は須恵器坏の口縁部片で、「66-3下堀」資料である。体部と口縁部の境界外面には幅広の凹線が設けられ、口縁は器壁を窄めながら直線的に開く。高坏坏部の可能性を残す。**MH8**も坏口縁部片。内面に「下堀原始墳墓地区 二八—五—一十八」の注記が残る。器壁がやや厚めの個体で、わずかに外反して口縁が開く。**MH9**も坏口縁部小片。外面に「御堀」の注記が見られる。

MH10は有蓋高坏坏部片。「66-3下堀」資料である。坏部は浅く、受部は焼き歪みによるものか下垂している。復元口径18.4cm、口縁端部からの残存高2.8cmを測るが、これは内面天井部の稜(残存率1/12)から復元を行った数値である。脚柱部との接合痕跡が見られないことから、有蓋高坏蓋の可能性も否定できない。**MH11**も「66-3下堀」資料で、口径から有蓋高坏坏部と判断した。器壁の薄い個体で、緩やかに内湾する坏部は深く、受部とかえりのつくりはシャープである。胎土や焼成状態はMH10と類似する。復元口径15.8cm、口縁端部からの残存高は3.7cmを測る。遺存する受部(残存率1/12)から復元している。**MH12**も「66-3下堀」資料で、2片が接合した高坏脚柱部である。裾が大きく開く脚柱部で、外面の沈線間に長方形透かしを設けている。透かし幅は不明ながら、遺存する透かしの間隔から3方向透かしであることが分かる。

MH13も「66-3下堀」資料で、天井部と口縁端部が欠失するが、壺蓋とみられる。丁寧なつくりで、口径は9cm程度、器高は2.7cm程度である。**MH14**も「66-3下堀」資料。長頸壺の頸部片であり、頸部最小復元径は6.4cmを測る。**MH15**は壺の底部片。内面に「□□(御堀か)円墳付近9I」の注記が見られる。丸底の底部で、外面に回転ヘラ削り、内面に回転ナデが施される。

MH16は「66-3下堀」資料で、甕の口縁部小片。頸部から直線的に外傾して口縁が立ち上がり、口縁内端を肥厚させる。口縁内面には灰を被っており、内端直下に短斜線のヘラ記号を4条以上施している。**MH17**も「66-3下堀」資料で、甕の口縁一肩部片。口縁は短く直立し、端部は内傾させて面を取り、

山口市大内御堀の採取遺物

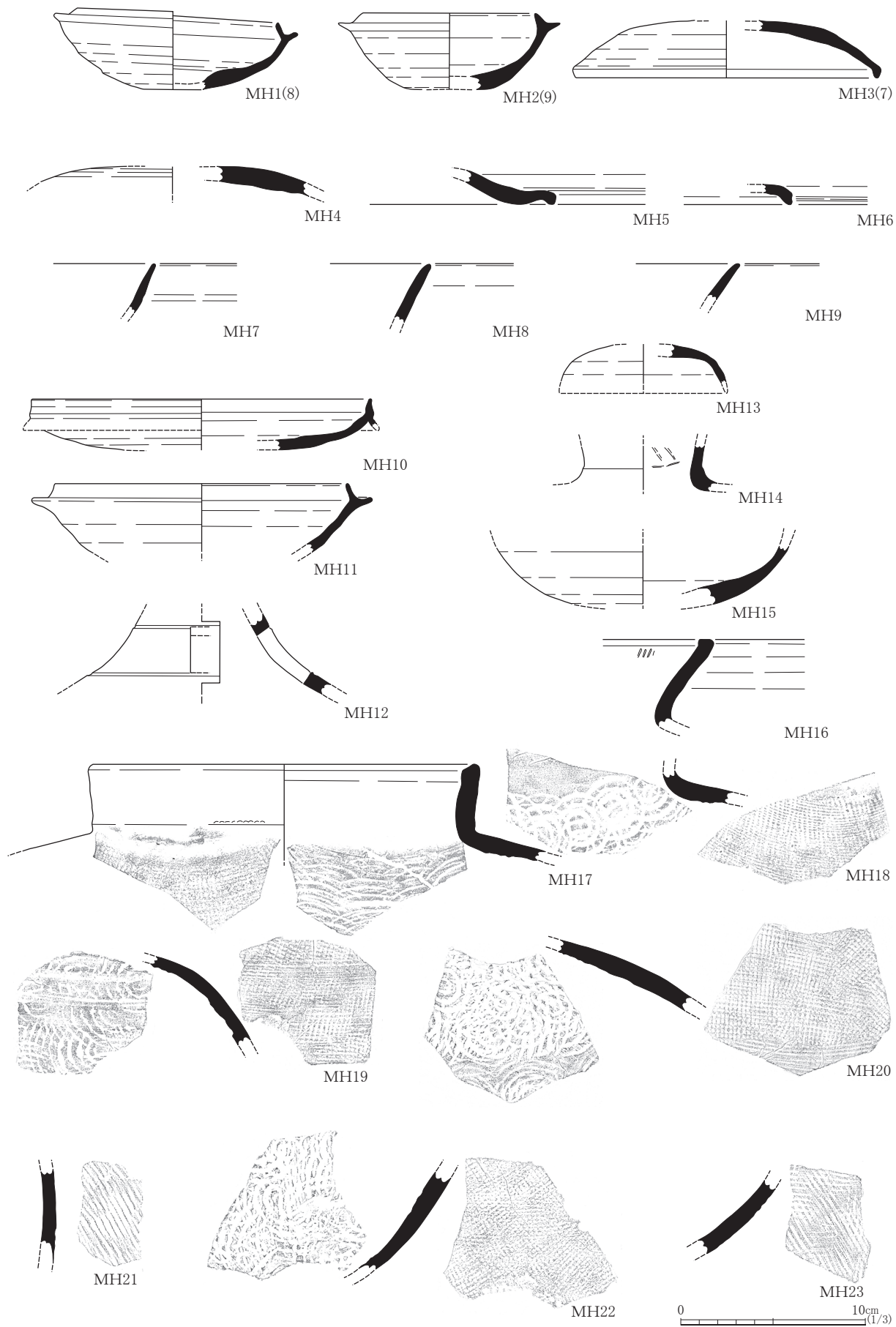


図70 遺物（土器）実測図①

内端をわずかに肥厚させる。肩部外面は平行文叩き(4条/cm)後カキ目を施し、内面は同心円文当て具痕をそのまま残す。頸部外面には板状工具の当たり痕が残っている。口縁端部と肩部外面に灰を被っている。**MH18**も「66-3下堀」資料。甕の頸-肩部片で、肩部外面は全面に灰を被っており、左上がりの平行文叩き(4条/cm)後カキ目が施されている。内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。胎土の特徴や焼成状態からMH16と同一個体である可能性が高い。**MH19**は甕の肩-腹部片か。外面は縦および斜めの擬格子平行文叩き(4条/cm)後部分的にカキ目が施され、内面は同心円文当て具痕に部分的な横ナデが施される。**H20**は「66-3下堀」資料で甕の肩部片とみられ、断面に「下堀原始墳墓地区」「二八一五-十八」の注記が残る。外面は横および斜めの擬格子平行文叩き(4条/cm)後部分的なカキ目が、内面は同心円文当て具痕に部分的な横ナデが施される。H19と同一個体とみられる。**H21**は甕体部小片。外面には平行文叩き(3.5条/cm)が施され、内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。他に同一個体の可能性がある体部小片が7点採取されている。**H22**は甕底部付近の破片とみられる。外面は擬格子平行文叩き(4条/cm)が不定方向から施されており、内面の同心円文当て具痕はそのまま残す。胎土や器面調整の特徴から、H19・H20と同一個体である可能性が高い。**H23**も甕底部付近の破片。外面の平行文叩き(3.5条/cm)は不定方向から施されており、内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。H21と同一個体とみられる。

H24は壺の口縁部片。内面に「御堀 I 25.12.1□」の注記が残る。年月日が事実であれば最古の採取品となるが、誤記の可能性が高いと考える。「く」字状に屈曲する口縁部で、下端に断面蒲鉾形の突帯を巡らせている。頸部には2条の沈線が巡らされており、沈線上位に櫛描波状文を密に施している。**H25**は内面に「御堀 □」の注記が見られる。壺頸部小片であり、頸部復元径は12~13cm程度とみられる。緩やかに外反して立ち上がる頸部の外面には、わずかに櫛描波状文が残る。**H26**は壺の頸-底部片で、復元腹部径6.4cmとなることから、子持壺の子とみられる。山口県での子持壺は、狐塚古墳(山口市阿東徳佐:図72の1~6)、桜の木古墳(山陽小野田市小野田:同図7)、青井古墳群第1号墳(下関市豊浦町:同図8)の3例しか知られていないことから、貴重な事例となる。頸部の窄まりが強い器形は、狐塚古墳例に似る。**H27**は器台の台底部片。外面に「御堀 8 I」の注記が見られるコンテナNO. 9-袋NO. 13資料2片と、内面に「下堀 墳墓地区 28.7.3」の注記がある「66-3下堀」資料1片が接合した。外面最上部に沈線が1条遺存しており、台底の外面には目の細かな平行文叩き(7条/cm)が、内面にも目の細かな同心円文当て具痕が見られる。**H28**は器台もしくは脚付壺の脚柱部片。内面に「吉敷郡大内村 大字御堀字下堀 最下部箱式棺付近散布 28.4.14」の注記がある。沈線間に上下2段の櫛描波状文が施されている。**H29**も同器種の脚柱部片で、沈線間に上下2段の櫛描波状文が施されており、長方形透かしの片側面が遺存している。**H30**は内面に「大内御堀下堀 原始墳墓地区出土」の注記が残る脚裾部片で、外方に広がる脚柱から裾部をほぼ垂直に下垂させている。外面の脚柱-裾境界部には沈線2条を巡らせており、脚柱部は上下2段で、裾部は1段で櫛描波状文を施している。復元裾部径は外端で27.0cm、残存高5.8cmを測る。径からみて器台裾部であろう。**H31**は脚裾部片。外面に朱書きで注記があるが判読不能である。裾端部は失われているものの、外面には断面三角形の突帯と一段の櫛描波状文が遺存している。

H32は「66-3下堀」資料で、土師器壺底部片。底部から体部が開き気味に内湾して立ち上がる。底部外端に断面三角形状の高台が付く。全面摩滅が著しく器面調整は体部外面の回転ナデしか観察できない。復元高台径5.6cm、残存高1.8cmを測る。**H32**は土師器甕口縁部片。頸部から外傾して口縁が開き、端部を屈曲気味に外反させている。残存高3.2cmを測る。

山口市大内御堀の採取遺物

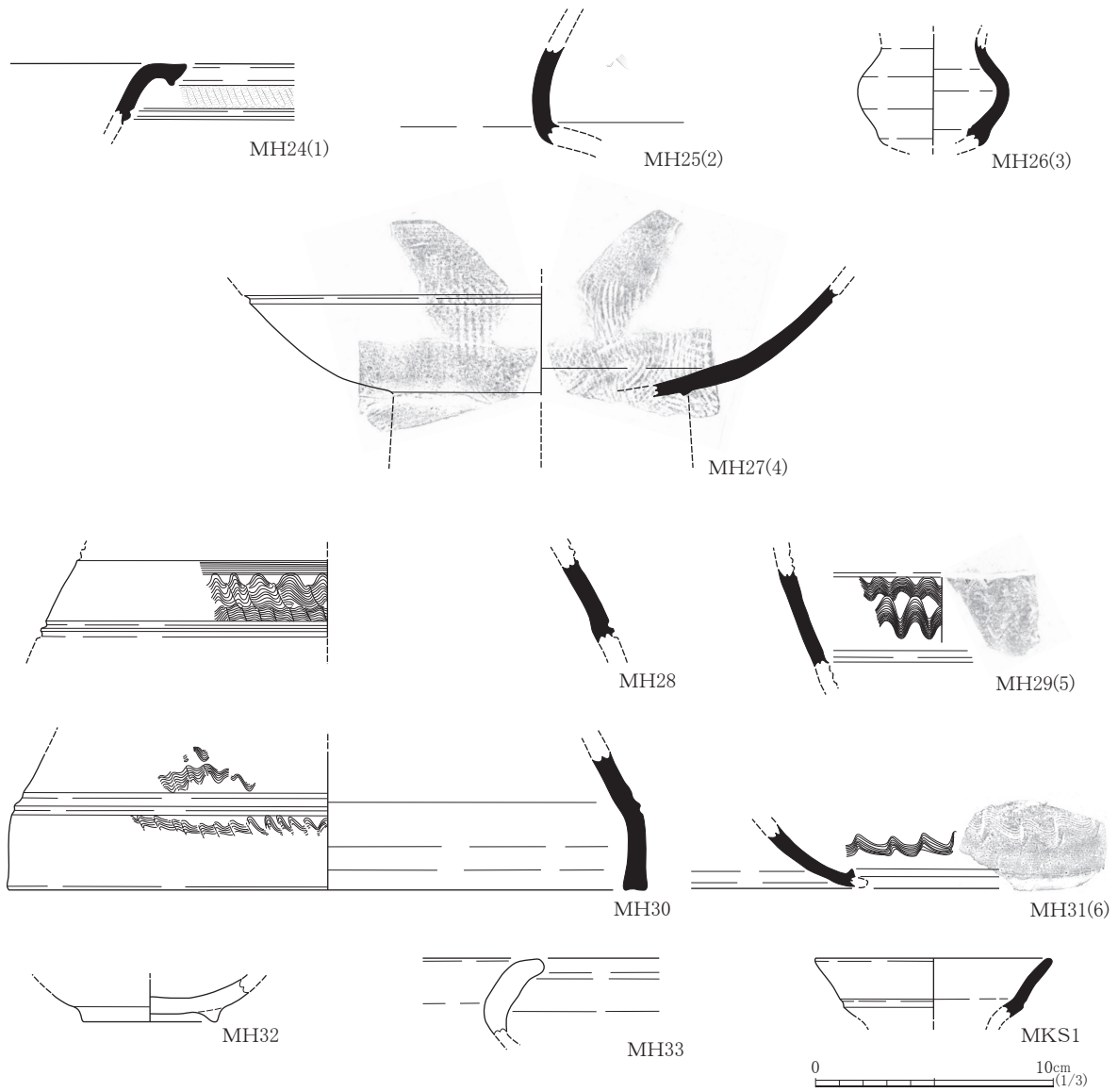


図 71 土器実測図②

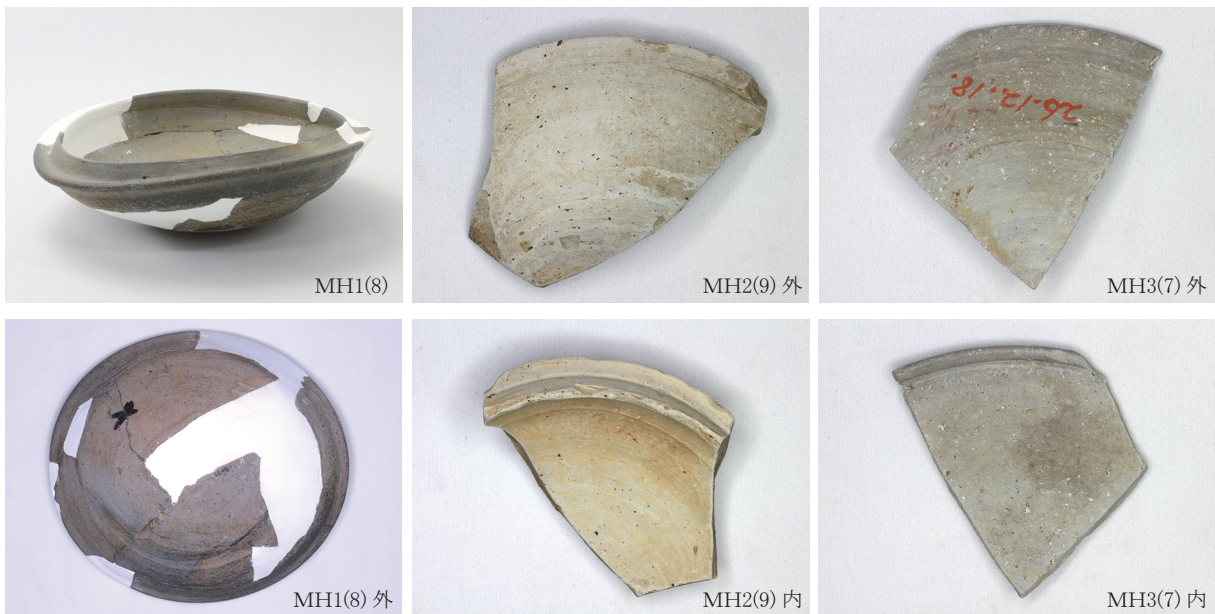


写真 162 遺物写真①

山口市大内御堀の採取遺物



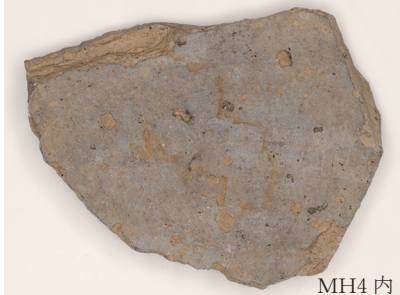
MH4 外



MH5 外



MH6 外



MH4 内



MH5 内



MH6 内



MH7 外



MH8 外



MH9 外



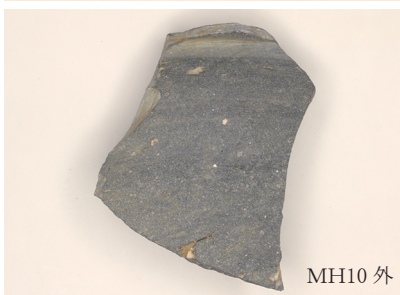
MH7 内



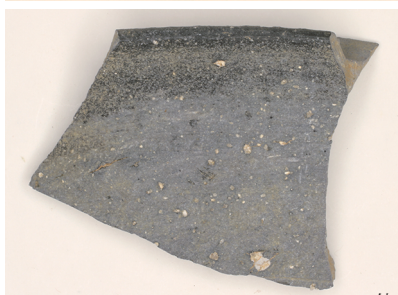
MH8 内



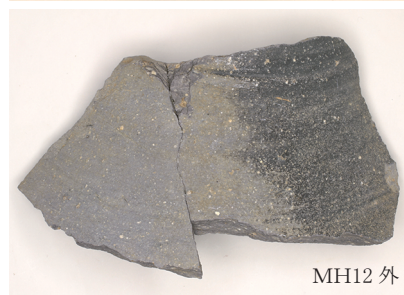
MH9 内



MH10 外



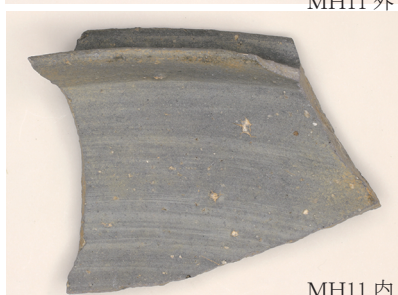
MH11 外



MH12 外



MH10 内



MH11 内



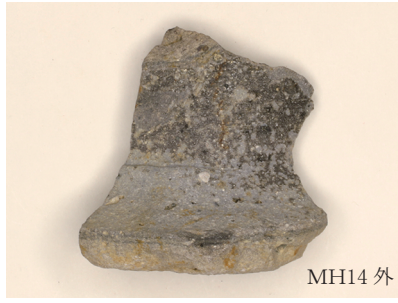
MH12 内

写真 163 遺物写真②

山口市大内御堀の採取遺物



MH13 外



MH14 外



MH15 外



MH13 内



MH14 内



MH15 内



MH16 外



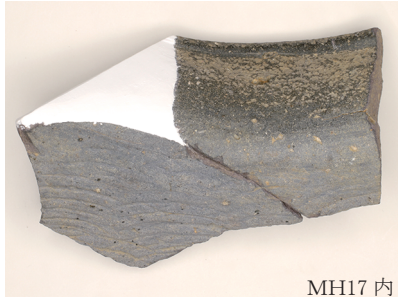
MH17 外



MH18 外



MH16 内



MH17 内



MH18 内



MH19 外



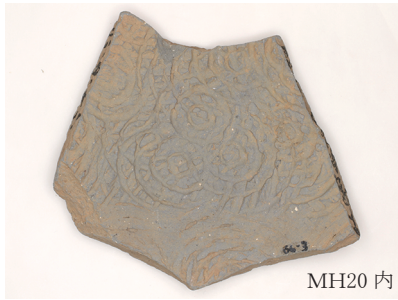
MH20 外



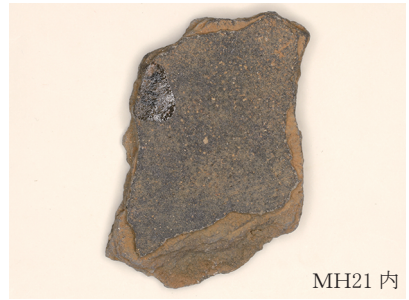
MH21 外



MH19 内



MH20 内



MH21 内

写真 164 遺物写真③

山口市大内御堀の採取遺物



写真 165 遺物写真④

山口市大内御堀の採取遺物

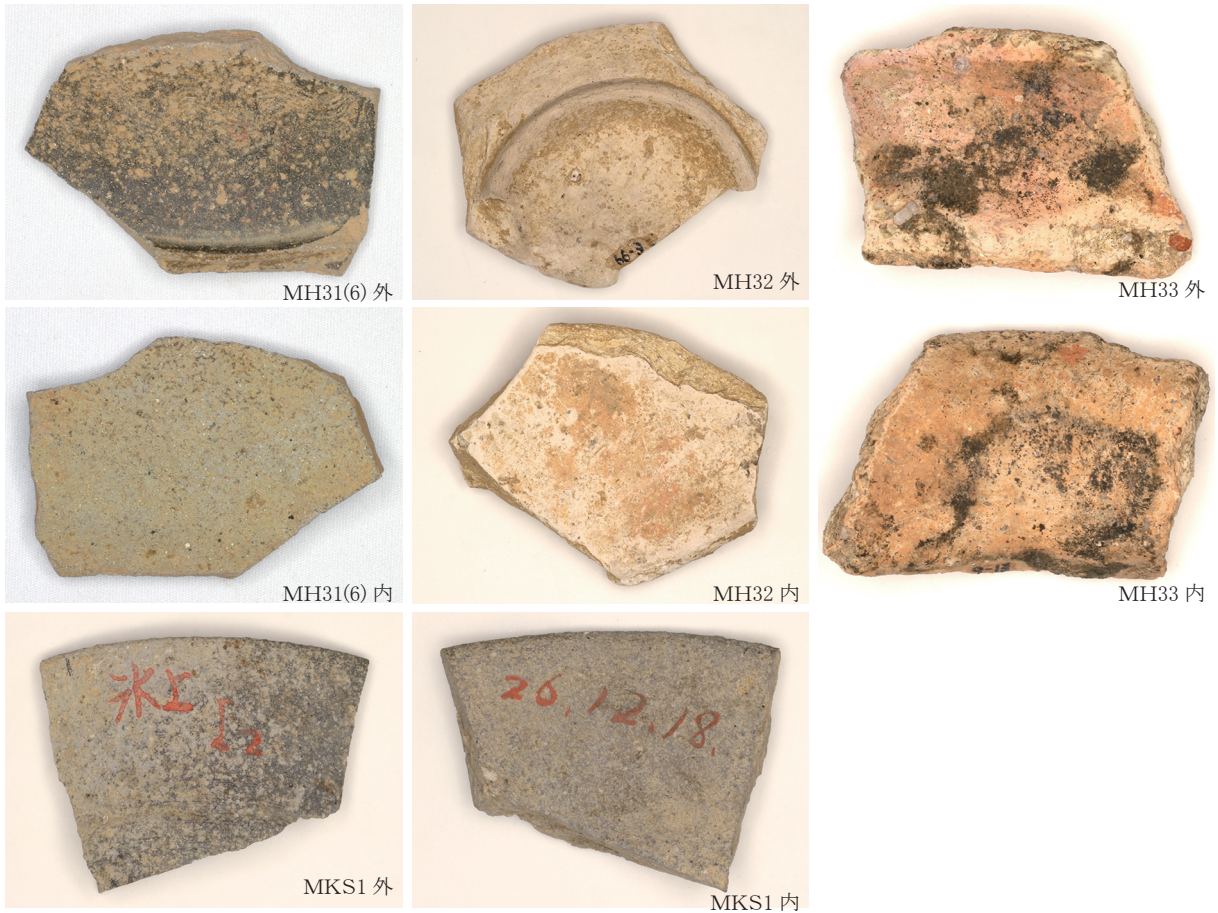
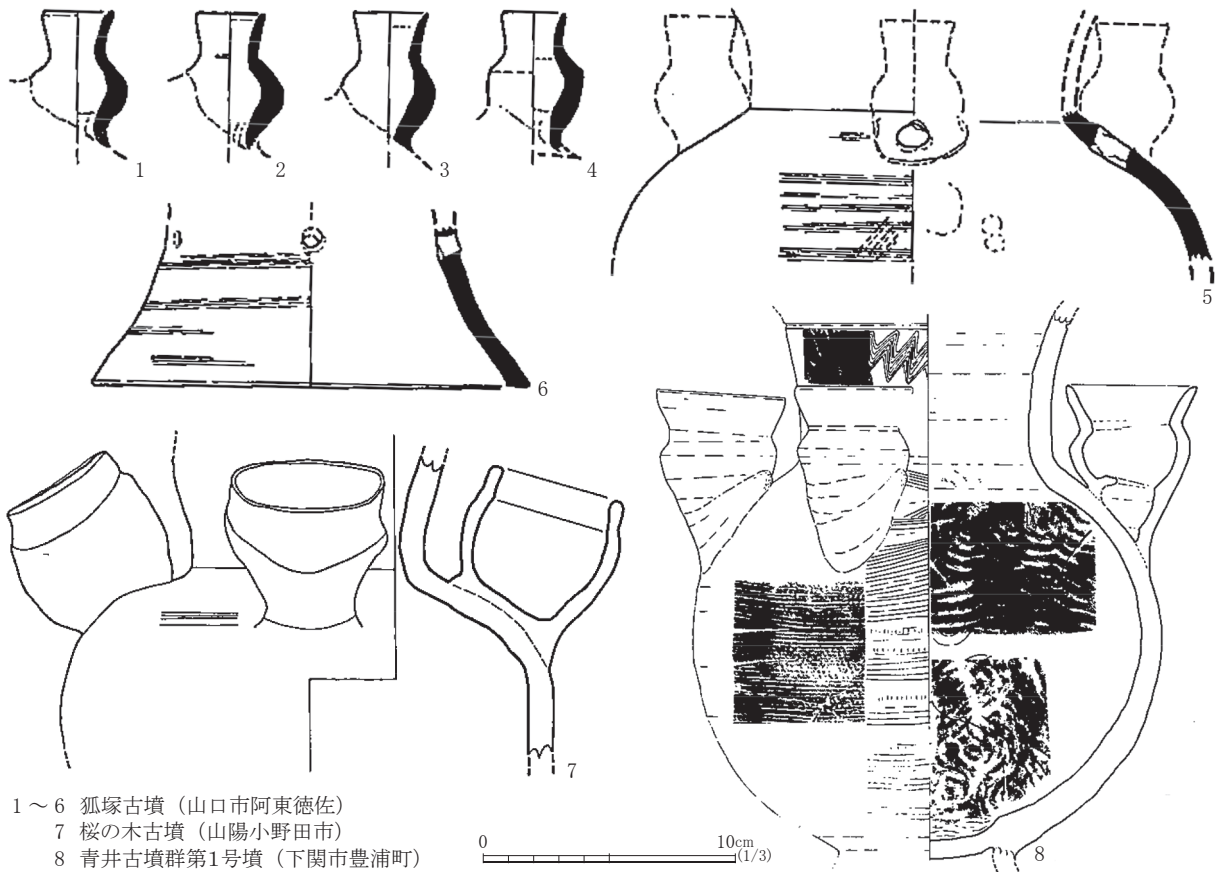


写真 166 遺物写真⑤



- 1～6 狐塚古墳（山口市阿東徳佐）
- 7 桜の木古墳（山陽小野田市）
- 8 青井古墳群第1号墳（下関市豊浦町）

図 72 山口県内出土子持壺実測図

3. 妙見社古墳群採取資料(図71・73、写真166～168、表10)

令和2年(2020)開催の『講座 古代ウォーク』では、大内氷上に所在する妙見社古墳群の現地見学も予定していたことから、当館収蔵品の確認を行ったところ、コンテナNO. 14-袋NO. 7に「氷上墳墓地区(妙見奥の院)」と記されたカードと共に、須恵器片9点が確認された。併せて報告を行いたい。

妙見社古墳群は、大内盆地の北山麓、宮野丘陵から派生する支丘端部に位置しており、支丘間の狭小な谷地には、創建年は不明であるが大内氏の氏寺である氷上山興隆寺が位置している。1号墳は谷の東側丘陵、宝乗坊跡推定地の北西に隣接した小丘陵上に、2号墳は谷奥部丘陵の南端部、妙見社上宮跡への山道東側に立地している(宇野ほか2002)(図73、写真167・168)。カードの記載内容から、当館収蔵資料は2号墳に所属するものとみて良い。

妙見社古墳群では、現在まで上記の2基以外に古墳は確認されていないようであるが、山口市発行の埋蔵文化財地図では、より広域に範囲が設定されている。その一方で、2号墳は興隆寺跡遺跡の範囲に含まれているものの、古墳群の範囲からは外れていることから(図69)、遺跡の正式名称は異なると推測される。歴史的経緯を重視し、本稿では資料の所属先を暫定的に「妙見社古墳群2号墳」としておく。

当古墳群に関しては、具体的な記述は『大内村誌』(佐伯1958)に限られていることから、以下に転載しておきたい。

妙見社付近の古墳

氷見妙見社の北に二個あって共に円墳である。その中の妙見社より遠い方の円墳は横穴式古墳で、奥壁を北にし、南に開口している。奥壁の中は五尺五寸五分、玄室の奥行一〇尺三寸、玄室と羨道との間には向って右に巾二尺、向って左に巾九寸の一枚石をもって区切っており、羨道の奥行は一尺五寸で極めて短い。天井はアーチ形をなし、高さは奥壁において四尺五寸、玄室入口の所で六尺一寸、多少土砂で埋っている。遺物は既に持ち出されて何も見当らない。(『大内村誌』61頁)

2号墳は墳丘・石室とも現存しているが、現在は「山口市の文化財を守る会」により立ち入りが禁止されているため、開口部からの観察しか行えない。佐伯氏の記述によると、左袖が広い両袖式の横穴式石室墳で、玄室長312cm、奥壁幅168cm、玄室高185～136cm、羨道残存長45cmを測るようである。

当館収蔵須恵器で図示可能なものは1点のみである。**MKS1**は甕の口縁部片。焼成の良好な資料で、頸部との境界に沈線を1条巡らせており、口縁はわずかに外反させる。復元口径10.0cm、残存高2.5cmを測る。外面に「氷上 I 2」、内面に「26.12.18」の注記が残る。日付から、御堀資料と同日に採取されたものであることが分かる。

他の8点は甕の小破片で、外面に平行文叩き、内面に同心円文当て具痕が観察される。

4. 小結(図74、写真169～171)

当館収蔵品の調査から、山口市大内地区御堀象頭山周域では、昭和26年(1951)12月から昭和28年(1953)7月まで山口大学関係者により複数回踏査が実施されたことが判明した。彼らは当地域を「下堀原始墳墓地区」と呼称したようであるが、昭和28年8月11日に現地踏査を行い、10月21日から23日にかけて箱式石棺1基と横穴式石室墳1基の発掘調査を実施した佐伯敬紀氏は、それぞれを「川向象頭山組合石棺」「川向古墳」と呼んでいる。

佐伯氏の記述によると、箱式石棺は可能性のあるものを含め5基が存在したようである。氏が調査した1基からは人骨歯以外の遺物は見られず(佐伯1958)、西方約100m地点で発見された1基からは鉄刀1振が出土したとされる(佐伯1961)。これらの石棺群は、弥生時代終末期から古墳時代初頭の所属とみら



写真 167 妙見社古墳群1号墳現況 (南から)
令和2年(2020)4月24日撮影



写真 168 妙見社古墳群2号墳現況 (南から)
令和2年(2020)4月24日撮影

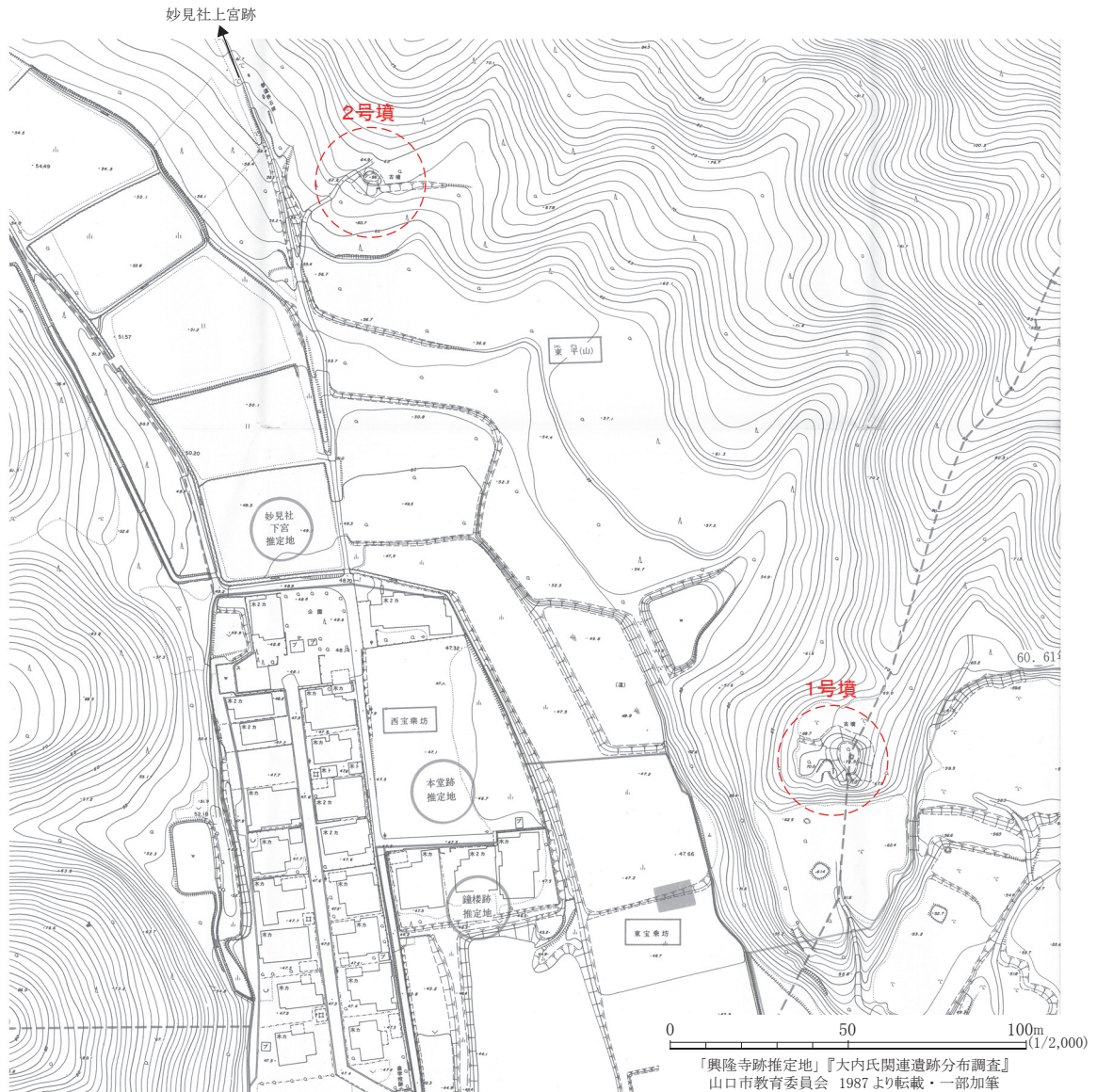


図 73 妙見社古墳群の位置

註¹⁰
れる。

同じく佐伯氏の記述によると、古墳は2基存在したようであり、山口大学関係者により採取された須恵器を主とする土器群の多くは、現状では両者のいずれかに所属したと考えられる。本稿に掲載した須恵器に関して、子持壺についてはすでに述べたところであるが、器台も河口域を含め榎野川水系域では稀な存在であり、現在までに出土が確認されているのは、河口域右岸の梅ヶ崎古墳群3号墳(奥原1998)、大浦古墳群3号墳(豊島1998)、中流域右岸の朝田墳墓群第IV地区第2号横穴墓(尾野1979)、朝倉河内古墳群第4号墳(斎藤1976)、中流域左岸の吉田遺跡遺物包含層出土資料(横山2021b)、支流である仁保川右岸の高尾古墳群表採資料(森田2001a)、そして象頭山墳墓群にて採取されたとみられる資料の7例に過ぎない。各出土状況を見ると、梅ヶ崎古墳群3号墳では、羨道横墳丘裾部に据えられた須恵器大甕内部から出土しており、大浦古墳群3号墳でも墳丘裾部から出土している。朝田墳墓群第IV地区第2号横穴墓では、玄室から前庭部、羨道に散らばる状態で出土したようである。報告者は盗掘には否定的で、前庭部に供献された(報告では「墓前祭祀」という用語が用いられている)土器が拡散したと推測している。一方、朝倉河内古墳群第4号墳では半壊した横穴式石室玄室床面から出土している。吉田遺跡出土資料は、吉田構内南東部にて検出される古代官衙の南西域を区画する埋没谷の上位に堆積した遺物包含層からの出土で、埋没谷の南西丘陵では古墳時代後期前半の円筒埴輪片が採取されている(吉田1986)ことから、古墳から流出したものと考えられる。高尾古墳群は、南に延びる丘陵先端付近の尾根上に築かれた5基からなる群集墳で、南北2箇所頂部の南側に築かれた(仮)3号墳が主墳(首長墓)と推定されている(磯部2004)。資料は丘陵南端の南斜面にて採取されていることから、(仮)3号墳に所属する可能性が高いと思われる。本稿紹介例を含め、榎野川水系域にて確認された須恵器器台の約半数は葬送時の使用状況が不明であることから、将来的な資料の増加に期待したい。

仁保川流域に展開する弥生時代から古墳時代の墳墓については、箱式石棺を主体部とし、葺石と埴輪を有する径約36mの円墳で、古墳時代中期中頃から後半に比定されている大塚1号墳(前田ほか1984)や、石棺系竪穴式石室を主体部とする全長約28mの前方後円墳で、古墳時代中期に比定されている大内氷上古墳(谷口1986)、全長約19mの前方後円墳であった可能性があり、古墳時代後期前半に比定されている山口市域最初期の横穴式石室墳、馬塚古墳(富士埜ほか1971)など、首長墓クラスの古墳



写真 169 象頭山箱式石棺
※昭和 28 年佐伯氏調査墳
(佐伯 1961 より転載)



写真 170 象頭山箱式石棺
※昭和 28 年佐伯氏調査墳より西に 100m
(佐伯 1961 より転載)



写真 171 象頭山横穴式石室
※昭和 28 年佐伯氏調査墳
(佐伯 1958 より転載)

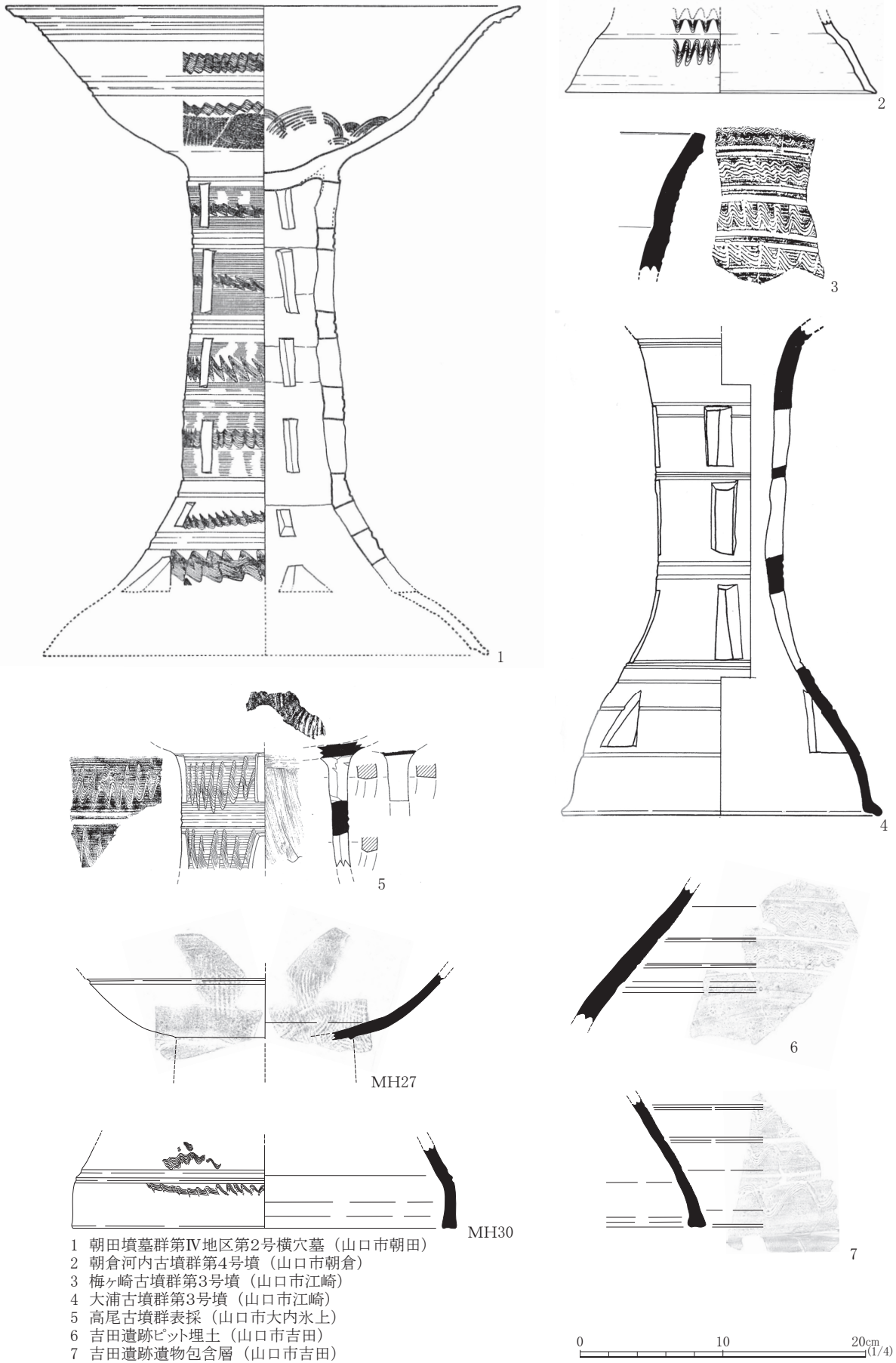


図 74 樺野川水系出土の須恵器器台

には発掘調査の手が及んでいるものの、その他の動向については不明確な点が多い。特に大内御堀および氷上の北側丘陵部に関しては、戦前の開発ばかりでなく(山本1936a・b)、戦後の急速な経済成長に伴う宅地開発のため、墳墓をはじめとする数多の遺跡が未調査のまま破壊された(森田2001b)と考えられる。

本稿に掲載した資料群は、正確な出土地点、出土状況が分からない2級資料とはなるが、上記の間隙を埋める考古学情報として貴重な存在となりうる。また、新制国立大学発足期に、知的好奇心を持って活動した本学教員、学生の記録としても一定の価値を有するのではなかろうか。

末筆ではあるが、本稿執筆の契機を与えてくれた令和2年度『講座 古代ウォーク』関係各位、特に本年度より高等学校教育の場へと復職を果たされた山口県立山口博物館の荒巻直大学芸員には、多大なる協力を得た。記して感謝の意を表したい。

【註】

- 1) 当該期間の本学の関わった県内遺跡の発掘調査歴については、当館にて開催した令和3年度山口県大学ML連携特別展『新制山口大学遺跡調査のあゆみ50'～60'』にてその概要を公開した。
- 2) 「御堀 I 25.12.1□」の注記も見られる(MH24:コンテナNO. 9袋NO. 13)ことから、御堀での採取は昭和25年(1950)に始まっていた可能性もあるが、26.12.18の誤記である可能性が高いと考える。
- 3) 小野氏の本学教育学部異動は昭和26年(1951)3月とされる(森田2019)。
- 4) かつて当地の埋蔵文化I包蔵地名は「御堀石棺」であった(文化庁文化財保護部1974)。
- 5) 令和2年(2020)5月25日、荒巻直大氏(山口県立山口博物館学芸員:当時)の計らいにより山口県立山口博物館にて実見した。いずれも内面に「大内村御堀福田屋裏山 28.8.11 佐伯」と注記されていた。
- 6) 佐伯氏は「川向古墳」と表記している(佐伯1958)。
- 7) 『山口県文化財概要 第4集』(1961)巻末に付された「山口県埋蔵文化財一覧」では、[発見年月日]昭和28年10月21日～23日、[発見者氏名]佐伯敬紀、[所在地]吉敷郡大内町川向、[遺跡および出土品](御堀遺跡)銅製剣破片(1)・金環(2)・銀環(2)・玉類(74)・人骨片 となっている。
- 8) 大内地区における佐伯氏の調査は、昭和29年(1954)12月に大内村議会にて編集が議決され、昭和33年(1958)に刊行された『大内村誌』にまとめられている(佐伯1958)が、山口大学学生による遺跡情報が注釈として付せられている。
- 9) 図の遺物番号末尾の括弧内数字は、拙稿(横山2020)にて付した番号であり、本稿をもって正式な遺物管理番号とする。
- 10) 佐伯氏によると、前述の箱式石棺の棺材には石墨千枚岩が用いられ、後述の箱式石棺には花崗岩系の材が用いられていたという。前者は山口盆地周域の箱式石棺に通用されている周防変成岩であろうが、花崗岩は兜山古墳(山口市秋穂二島)、赤妻古墳(山口市赤妻町)、大塚1号墳(山口市大内長野)など、主として古墳時代中期の首長墓墳に用いられていることから注意が必要である。
- 11) 1基は破壊が甚だしく、石室の残部がわずかに残るのみで、1基は封土や天井石は除去されるなど破壊が甚だしかったとされる。佐伯氏が発掘調査を実施したのは後者の古墳である(佐伯1958)。
- 12) 接合する破片の一部は遺構埋土からの出土であるが、中世遺構の埋没時に遺物包含層から混入したものとみられる。

【文献】

- 磯部貴文(2004)「高尾古墳群 第1次調査」, 山口市教育委員会文化財保護課(編)『山口市埋蔵文化財年報3—平成14(2002)年度—』, 山口
- 岩崎仁志(1998)「狐塚古墳」, 山口市教育委員会(編)『平成6～9年度 重要遺跡確認緊急調査報告書』山口県埋蔵文化財調査

報告 第185集, 山口

宇野慎敏ほか(2002)『山口の古墳』, 第28回九州・山口古墳時代研究会(編), 北九州(福岡)

奥原栄一郎(1998)「大浦古墳群 3号墳」, 山口県埋蔵文化財センター(編)『浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小郡開作経塚』山口県埋蔵文化財センター調査報告第1集, 山口

尾野栄明(1979)「朝田墳墓群第IV地区 第2号横穴墓」, 山口県教育委員会文化財課(編)『朝田墳墓群Ⅲ-B・Ⅳ 糸米遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第45集, 山口

斎藤英夫(1976)「第4号墳」, 朝倉河内古墳群発掘調査委員会(編)『朝倉河内古墳群調査報告書』山口市埋蔵文化財調査報告第4集, 山口

佐伯敬紀(1958)「先史時代」, 河野通毅(編)『大内村誌』, 山口

佐伯敬紀(1961)「大内町の諸遺跡」, 山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要 第4集』, 山口

谷口哲一(1986)『大内氷上古墳』山口県埋蔵文化財調査報告第96集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

豊島正行(1998)「大浦古墳群 3号墳」, 山口県埋蔵文化財センター(編)『浦辺古墳群 大浦古墳群 梅ヶ崎古墳群 小郡開作経塚』山口県埋蔵文化財センター調査報告第1集, 山口

富士埜勇ほか(1971)『馬塚古墳』, 山口県教育庁社会教育課(編), 山口

富士埜勇ほか(1987)『青井・大迫古墳群』, 富士埜勲(編), 下関(山口)

文化庁文化財保護部(1974)『全国遺跡地図 35 山口県』, 東京

前田耕次ほか(1984)『大塚古墳』山口県埋蔵文化財調査報告第78集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

前田耕次(1988)『小野田桜の木古墳』小野田市埋蔵文化財調査報告第3集, 小野田市教育委員会(編), 山陽小野田(山口)

森田孝一(2001a)「山口市高尾山古墳群内の表採須恵器に関して」, 森田孝一(編)『山口県考古学研究資料集報』, 美祢(山口)

森田孝一(2001b)「山口市氷上遺跡(仏供田遺跡)の破壊と遺物について」, 森田孝一(編)『山口県考古学研究資料集報』, 美祢(山口)

森田孝一(2019)「小野忠熙先生追悼集 略歴」, 山口考古学会(編)『山口考古』第39号, 防府(山口)

山本博(1936a)「周防御堀出土の弥生式遺物—石蓋土壙—」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』26巻3号, 東京

山本博(1936b)「周防・御堀出土の弥生式遺物—石蓋土壙—」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』26巻8号, 東京

横山成己(2020)「館蔵品調査報告—古墳時代から平安時代の遺物—」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成27年度—』, 山口

横山成己(2021a)「地域連携トピックス 講座「古代ウォーク」」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『てらこや埋文 令和3年春号』山口大学埋蔵文化財資料館通信第61号, 山口

横山成己(2021b)「1. 実習棟(動物病理解剖施設)新営その他工事に伴う予備発掘調査・本発掘調査 (5) 遺物」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成28年度—』, 山口

吉田寛(1986)「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口

表10 遺物(土器)観察表

質量()は復元値 △は残存値

遺物 番号	コンテナ 袋	器種	部位	法量 (cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	焼成	備考
				①口径 ②底径 ③器高					
MH1	コンテナ9 袋13	須恵器 坏身	完形復元 可能	①10.3~11.8 ②3.2 ③3.6~4.4	①灰白色(N7/)~灰色(N4/) ②灰色(N6/)	密	良好	焼き歪みの大きな個体、口縁はシャープに仕上げられる。外面は1/2下に回転 ヘラ削りを施す。 内面に赤字で「御堀 □1」の注記がある。	
MH2	コンテナ9 袋13	須恵器 坏身	口縁 ~底部	①(9.3) ②(4.5) ③4.15	①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(5Y8/2)	密	やや不良	底部から強く内湾して体部が立ち上がる。口径に比して器高が高い。口縁は 内傾して短く立ち上がる。外面は底部付近のみ回転ヘラ削りが施される。 内面に赤字で目付と見られる「2□1□1□(8?)」の注記がある。	
MH3	コンテナ9 袋13	須恵器 坏蓋	天井 ~口縁	①(16.6) ③△3.1	①②灰色(N7/)	密	良好	やや扁平なドーム状の天井から内湾して口縁に降下する。口縁端部は下垂さ せ、丸く収める。 外面に赤字で「御堀 2II 26.12.18」の注記がある。	
MH4	コンテナ9 袋13	須恵器 坏蓋か	天井部		①灰色(N6/)~にぶい黄褐色(10YR7/3) 重ね焼部 灰色(N6/) ②褐灰色(10YR6/1)	密	良好	外面にナデおよび回転ヘラ削りが施され、内面は不定方向のナデが施され る。外面には円形の重ね焼痕が残る。 外面に墨書きで「下堀原始墳墓地区出土」の注記がある。	
MH5	コンテナ66 袋3	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.85	①②灰白色(5Y8/1)	密	やや不良	器壁の厚い個体で、扁平な天井部から口縁が屈曲味に開く。口縁端部を 下垂させる。内外面に回転ナデを施す。	
MH6	コンテナ30 袋2	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.05	①褐灰色(10YR6/1)~ にぶい黄褐色(10YR6/3) ②灰白色(5Y7/1)	密	良好	口縁端部を短く下垂させる。 外面に墨書きで「御堀 28.4.14」の注記がある。	
MH7	コンテナ66 袋3	須恵器 坏	口縁部	③△2.7	①灰色(N6/) ②灰色(N7/)	密	良好	器壁が薄くシャープなつくり。内外面に回転ナデを施す。高坏部部の可能性 あり。	
MH8	コンテナ9 袋13	須恵器 坏	口縁部	③△3.15	①灰オリーブ色(5Y6/2) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	器壁のやや厚い坏口縁部。直線的に外方に開く。内外面回転ナデを施す。 内面に墨書きで「下堀原始墳墓地区 二八・五一・一八」の注記がある。	
MH9	コンテナ30 袋2	須恵器 坏	口縁部	③△2.0	①②灰白色(N7/)	密	良好	口縁が直線的に開く。 外面に墨書きで「御堀」の注記がある。	
MH10	コンテナ66 袋3	須恵器 有蓋高坏蓋	口縁 ~天井部	①(18.4) ③△2.8	①灰色(N5/)~灰白色(N7/) ②灰白色(2.5Y8/1) ~灰白色(N7/)	密	良好	扁平な天井部から口縁を短く下垂させる。境界部に突帯が付くが、焼き歪みの ためか上方を向く。他に同一個体と見られる天井部片が1点存在する。 MH27とセット関係の可能性ある。	
MH11	コンテナ66 袋3	須恵器 有蓋高坏か	口縁 ~底部	①(15.8) ③△3.7	①灰色(N5/~4/) ②灰色(N6/)	密	良好	受け部から口縁が内傾して立ち上がる。胎土や焼成具合からMH28とセット関 係の可能性ある。	
MH12	コンテナ66 袋3	須恵器 高坏	脚部		①灰色(N4/)~灰白色(N7/) ②灰色(N4/)~灰白色(7.5Y7/1)	密	良好	裾部が大きく開く。上下2条の沈線間に長方形透かしが入る。透かし幅は不 明だが3方向透かしと見られる。内外面とも回転ナデが施される。	
MH13	コンテナ66 袋3	須恵器 壺蓋か	口縁 ~天井部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密	良好	内外面とも回転ナデを施す。復原係が小さいことから蓋蓋と見られる。	
MH14	コンテナ66 袋3	須恵器 壺	頸部	頸部径(6.4)	①灰色(5Y6/1) ~オリーブ黒色(5Y3/1) ②灰色(5Y6/1~N6/)	密	良好	内外面に回転ナデを施す。 資料に注記はないが、遺物袋の中に「f66-3 下堀」と記されたカードが納入さ れていた(採取当時のカードではなく、後の整理作業過程で入れられた新し いカード)。以下MH30まで同様。	
MH15	コンテナ9 袋13	須恵器 壺	底部	③△3.1	①②灰色(5Y6/1)	密	良好	外面には幅1.6cm程度のヘラ削りが施される。 内面に赤字で「□□(御堀?)」印付付近 9 J」の注記がある。	
MH16	コンテナ66 袋3	須恵器 甕	口縁部	③△4.7	①②灰色(N5/) 内面灰 灰白色(5Y7/2)	密	良好	口縁内端を肥厚させる。内面には現状で直線4条のヘラ削りが残る。内面に 灰被る。MH23と同一個体の可能性あり。	
MH17	コンテナ66 袋3	須恵器 甕	口縁 ~肩部	①(21.0) ③△5.2	①灰色(N5/) ②灰色(N6~5/) 灰 浅黄色(5Y7/3)	密	良好	頸部からほぼ垂直に口縁が立ち上がる。口縁内端を肥厚させる。肩部外面 に平行叩き後カキ目を施す。内面には同心円当て具痕が残る。口縁内面と肩部 外面に灰を被る。	
MH18	コンテナ66 袋3	須恵器 甕	頸~肩部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰色(N6/)	密	良好	肩部の外面に平行叩き後カキ目を施す。内面には同心円当て具痕が残る。外 面には灰被る。MH22と同一個体の可能性あり。	
MH19	コンテナ9 袋13	須恵器 甕	体部		①にぶい黄褐色(10YR7/4)~灰黄色(2.5Y6/2) ②灰色(N6/)	密	良好	外面に平行叩きが施される。内面の同心円当て具痕は上部がナデ消されてい る。外面の直線沈線はヘラ削りか。MH14と同一個体。	
MH20	コンテナ66 袋3	須恵器 甕	体部		①②にぶい黄褐色(10YR7/3)~灰色(5Y6/1)	密	良好	外面に平行叩きを施す。内面には同心円当て具痕が残る。MH13・14と同一個 体の可能性あり。 内面に墨書きで「下堀原始墳墓地区 二八・五一・一八」の注記がある。	
MH21	コンテナ9 袋13	須恵器 甕	体部		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ~灰色(N4/) ②灰色(N4/)	密	やや不良	外面に平行叩きが施される。内面の当て具痕を丁寧にナデ消す。同一個体と 見られる破片が7点存在する。	
MH22	コンテナ9 袋13	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/1)~にぶい黄褐色(10YR7/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)~灰色(N6/)	密	良好	外面に平行叩きは不定方向に施される。内面には同心円当て具痕が残る。 MH13と同一個体。	
MH23	コンテナ9 袋13	須恵器 甕	体部		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ~灰色(5Y6/1) ②にぶい黄褐色(10YR7/3) ~灰色(5Y4/1)	精緻	良好	外面は平行叩きが直交気味に施される。内面は当て具痕を丁寧にナデ消す。	
MH24	コンテナ9 袋13	須恵器 壺	口縁部	③口縁下2.5	①灰色(N5/) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密	良好	「く」字状に強く屈曲する壺の口縁部片。口縁下端に突帯を1条廻らせる。頸 部に2条以上の沈線を通らせ、その上位に櫛波状文を施す。内面に赤字 で「御堀 I 25.12.1□」の注記がある。	
MH25	コンテナ9 袋13	須恵器 壺	頸部		①②灰色(N4/)	密	良好	外面に櫛波状文を施す。 内面に赤字で「御堀 □(Iか)」の注記がある。	
MH26	コンテナ9 袋13	須恵器 小型壺	頸 ~底部	腹部径(6.4)	①灰色(N6/~N4/) ②灰色(N6/)	密	良好	半製品であり、口縁部と底部を欠失している。子持壺に付く子壺と見られる。 注記は見られない。	
MH27	コンテナ9 袋13	須恵器 器台	器台底部		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	密	良好	外面上部に沈線が1条廻る。外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が残 る。外面に赤字で「御堀 18」の注記がある。	
MH28	コンテナ14 袋10	須恵器 器台	脚部	③△3.2	①灰色(5Y6/1)~5/1) ②灰白色(5YR7/1)~にぶい黄褐色(10YR7/4)	密	良好	沈線による区画帯に櫛波状文が2段に施される。 内面に墨書きで「吉城郡大内村 大字御堀字下堀 最下部箱式棺附近散布 28.4.14」の注記がある。	
MH29	コンテナ9 袋13	須恵器 器台か	脚部		①灰白色(10Y7/1) ②灰色(N5/)	密	良好	沈線による区画帯に櫛波状文が施される。長方形透かしの片側面が残る。 注記は見られない。	
MH30	コンテナ9 袋13	須恵器 器台	脚部	裾部径(27.0) ③△5.8	①にぶい黄褐色(10YR7/4)~灰色(5Y6/1) ②灰色(5Y6/1)~灰色(N6/1)	密	良好	脚部から2条の沈線を境界とし裾部を垂直に下垂させる。沈線の上部に2段 以上、下部に1段の櫛波状文を施している。櫛原体は上部が6~7条、下部 が5条。内面は回転ナデを施す。 内面に墨書きで「大内村御堀下堀 原始墳墓地区出土」の注記がある。	
MH31	コンテナ9 袋13	須恵器 器台か	脚部		①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y7/2)	密	良好	裾部は欠失する。端部の上位に沈線を1条廻らせ、その上位に8条の櫛 波状文を施す。外面に赤字の注記は判読不能。	
MH32	コンテナ66 袋3	土師器 壺	底部	高台径(5.6) ③△1.8	①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)~にぶい橙色(7.5YR7/4)	密	良好	内外面とも風化が激しい。断面三角形の高台が付く。	
MH33	コンテナ9 袋13	土師器 甕	口縁部	③△3.2	①にぶい橙色(5YR7/4) ②にぶい橙色(5.5YR7/4)	密	良好	口縁端部を強く屈曲させる。	
MKS1	コンテナ14 袋7	須恵器 甕		①(10.0) ③△2.5	①灰白色(5Y7/2)~灰色(N5/) ②灰白色(5YR7/1~7/2)	密	良好	頸部と口縁の境界に沈線を1条施す。内外面回転ナデ調整。 朱書きで外面に「氷上 I 2」内面に「26.12.18」の注記がある。遺物カードに 「墳墓地区(妙見奥の院)」の注記がある。 他に須恵器甕体部片8点が存在し、「氷上 7 I 26.12.18」の注記も見られる。	